



Title	古ロシア史の国際会議に参加して
Author(s)	鳥山, 成人; Toriyama, Shigeto
Citation	スラヴ研究, 16, 271-275
Issue Date	1972
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5024
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112951.pdf



古ロシア史の国際会議に参加して

鳥 山 成 人

本年(1971)5月7日と8日、ベルリン自由大学の東ヨーロッパ史の教授フィリップ(Werner Philipp)氏の主催で、古ロシア史(Altrussische Geschichte)の専門家の国際会議が西ベルリン市内の某ホテルを会場に開かれた。私はとくに古ロシア史を専攻している者ではないが、招かれて参加したので、以下、〈スラヴ研究〉の誌上をかりて、会議の様と若干の感想を記したい。会議に提出された報告のテーマは実に多様で、その内容に立入ることはここではできない。これらをまとめた論集が近く刊行される予定なので、内容についてはそれに譲らせていただく。

この古ロシア史の会議は、アメリカのオレゴン大学のアレフ(Gustave Alef)教授の提唱で1968年4月、カルフォルニアのクレアモントで開かれたのが第一回で、ベルリンの会議は二回めのものであった。二回ともこの会議は、半ば公的で半ば私的な専門家の談話会(Gespräch)という性格をもち、いわゆる学会の形式にとられない点に一つの特色をもっていた。今度の会議では、一部に、この会合を今後もう少し組織的なものにしては、という提案もあったが、参加者の多くは、この会議の自由な性格を保持したいという意見であった。従って、三回目の会議を何時、何所で、誰が主催して、誰々を招待して開くかも、今度の会議ではきめられなかった。誰が会員かもはっきりしていない会議であるが、恐らく数年後に、熱心な何人かの人が連絡しあって、次回の会議が招集されるものと思われる。私は会議の前夜、参加者の顔合せを兼ねて開かれた打合せ会で、急に求められて日本のロシア史研究について簡単な報告をし、また帰国後、古ロシア史関係の主要な(と私に思われた)日本語文献のリストを作成、独訳してフィリップ教授に送付した。これは複写されて、会議参加者全員に配布されたはずであり、数年後日本の古ロシア史家の誰かのところに、会議への招待状が無いこむ可能性もなくはなく、また私はそれを期待している。日本の古ロシア史研究の成果は国際的な評価をうけなければならず、またその評価に耐えうる業績もなくはない、というのが、私がこの会議に出て確信したことの一つであるから。

この会議の自由な性格は、報告テーマの決定が完全に報告者の意志にゆだねられているという点にも現れていた。報告のテーマは、古ロシア史に関するものであればなんでもいいのであって、このため、今度の会議でも報告のテーマは、以下にみるように実に多彩なものになった。しかし他面、この報告は招待者にとって義務であり、参加者はすべて報告を提出するというのが、少くとも建前であった。今度の場合、参加者は謄写用原紙に打った報告を前年即ち1970年の12月1日までにフィリップ教授に送付し、これをフィリップ教授は複写して事前に参加者に配布するというのであった。しかし、実はこれも——自由な会議にふさわしく——厳密には、建前がそうであるということであつたらしく、報告提出の期限を厳守した人は多くなかった。最後の報告は会議が始まってから配られた。そ

ればかりでなく、大学紛争で時間がなかった、などという理由で、結局報告を提出しないままこの会議に出席した招待者も何人かはいた。彼らは、初めは恐縮していたが、会議中討論の司会を積極的に引受けるなどして、かなり失点をとりかえた。

しかし、それはともかく、報告の多くが、予めかなりの時間的余裕をもって全員に配布されていたことは、会議に限られた分野の少数の専門家のものであったことと相まって、2日間の討論を非常に内容の充実したものにした。どの報告についても討論は、報告者の短かい補足説明の後、序論ぬきですぐ史料解釈や方法論の専門的な問題に入った。印象批判やその場での思いつきの発言と思われるものは少なく、それぞれ何人かの人の予め準備された綿密な質問、批判を中心に、報告の内容と論理に即したきびしい討論が展開された。言葉の不自由な私は多くの討論についていくことができず、そのため非常に疲れたが、自国語で自由な討論をしていた参加者のなかにも、この会議はかなりのハードワークであると述懐している人がいた。なにしろ、ベルリン在住者を除いて、他の参加者は全員会場のホテルに宿泊させられ、会議は朝食後すぐ始められて夕刻おそくまで続き、部分的には、その間の散歩や食事の時間、時には夕食後にももちこされたのである。しかし、それだけに、会議の収穫はどの参加者にとっても大きなものであったといえる。私は、国際的な学会への参加の経験に乏しいが、昨年(1970)夏のモスクワの国際歴史学会大会——あのとらえどころのないマンモス学会に比べて、このようなささやかな専門家の集まりこそが、学問の進展を支える本当の学会ではなからうか、との感を深くした。

さて、予め提出・配布されていた報告は、会議前夜の打合せ会の話し合いにより、次のような順序で取上げられた。(括弧内は所属大学)。

[5月7日午前]

K. Zernack (Frankfurt), Fürst und Volk in der ostslavischen Frühzeit.

C. Goehrke (Münster), Einwohnerzahl und Bevölkerungsdichte altrussischer Städte. Methodische Möglichkeiten und vorläufige Ergebnisse.

R. E. F. Smith (Birmingham), The Pattern of Forest Cultivation in Toropets Uezd in the Mid-16th Century.

W. Philipp (Berlin). Die historische Bedeutung des Žitie und Slovo Aleksandra Nevskogo.

[5月7日午後]

E. Hösch (Saarbrücken), Griechischkenntnisse im alten Russland.

G. Alef (Oregon), The Army as an Instrument of Centralization: Reforms of the Second-Half of the 15th Century.

O. P. Backus III (Kansas), Mortgages, Alienations, and Redemptions: the Rights in Land of the Nobility in 16th Century Lithuanian and Muscovite Law and Practice compared.

S. Toriyama (Hokkaido), On the Muscovite Autocracy: A comparative Review.

[5月8日午前]

R. O. Crummey (Yale), The Reconstitution of the Boiar Aristocracy, 1613-45.

古ロシア史の国際会議に参加して

H.-J. Torke (Berlin), Die Bedeutung der Zemlja im 17. Jahrhundert.

W. Leitsch (Wien), Die Stadtbevölkerung im Moskauer Staat in der zweiten Hälfte des 17. Jahrhunderts.

[5月8日午後]

G. Stökl (Köln), Einige Bemerkungen zum Staatssiegel Ivans IV.

W. G. Contius (Berlin), Profane Kausalität oder göttliches Handeln in der Geschichte: Zum Geschichtsbild in den erzählenden Quellen der Smuta.

F. Kämpfer (Heidelberg), Ivan Groznyj und Hilander.

以上の報告者のうち最後のケンプフェルは、報告は提出したが都合で出席できず、その報告は結局取上げられなかった。逆に、報告を出さずに会議に参加したのは、次の諸氏であった。

B. Nørretranders (Kopenhagen)

W. Schulz (Berlin)

M. Hellmann (Münster)

H. Neubauer (Heidelberg)

K. Meyer (Berlin)

2日間の日程の最後に、古ロシア史研究の一般的問題について懇談が行われた。この会議の提唱者の一人で、今度の会議でも終始最も精力的に発言してきたアレフ教授が、ここでも最初に発言し、比較史的方法の導入、他の専門 (disciplines) との協力、ソ連学界との協力などの主張を展開した。このアレフ教授のいかにもアメリカの学者らしい提言に対して、フィリップ教授は、比較史的方法や他の専門との協力には、準備が必要であり、共通の知識が前提にならなければならない、という趣旨の慎重論を述べ、一方ツェルナク教授は、比較史の問題に関してドイツの Landesgeschichte との接触が有効であろうことを示唆し、ソ連の学者との協力については、既に10年来行われているチェコやポーランドの学者との共同研究の例が参考になろう、と述べた。他の参加者の発言のなかでとくに印象に残ったのは、フィリップ教授の助手のトルケ氏のもので、氏は、19世紀以来使われてきたロシア史に特有な様々な概念や名辞について、その由来の史学史的検討と意義の明確化が必要であると説き、これは私も大いに共感したところであった。参加者の多くが意見の一致をみたのは、ソ連にある史料の自由な利用に困難のあることが、ロシア史研究の最大の障害になっているという点であった。私はベルリンの会議の後、エアランゲン、ミュンヘン、チュービンゲン、フライブルク、マールブルク、キール、ハンブルクの諸大学を訪問し、そこで会ったのは主にロシア近・現代史と東中欧史、南東欧史の専門家であったが、彼らのうち若干の人からも、未刊史料の利用の困難について、同様の意見をきかされた。しかしこれらの大学の多くでは、刊行された史料や雑誌、研究書に関する限り、かなり古いものも含めて研究資料は実によく整備されており、日本のロシア史研究者の目には、未刊史料の利用の困難が問題になることは、むしろうらやましいことと映った。

この会議には西ドイツとアメリカから多数の研究者が参加し、討論の用語もおのずからドイツ語と英語になった。この両国以外では、イギリス、デンマーク、オーストリア、日

本から一人ずつ参加し、それから、フランスからは一人も参加者のいないのが、とくに目についた。しかしこれは、ある程度、古ロシア史研究の現在の国際的情况を反映していたといえる。私は西ドイツ旅行の後パリに数日滞在して帰国したが、フランスのロシア史研究は、研究者の層の厚みという点で西ドイツにかなり見劣りし、とくに古ロシア史については、現在は注目すべき専門家が見当らないことを知った。これには、学術研究の面でもかなり中央集権的なフランスで、スラヴ研究の中心になっているパリのスラヴ研究所の現在の所長が、近・現代史専攻のポータル (R. Portal) 教授である、という事情も働いているように、私には思われた。

東ドイツからも参加者はなかったが、これは学問の問題というより政治の問題であり、東西ドイツの学術交流は今なおほとんど行われていない、とのことであった。しかし、西ドイツとソ連や東欧諸国との学問的交流は、今ではかなり自由になっており、今度の会議でも、はじめソ連からジミン (A. A. Зимин) 教授を招く計画であったことをきかされた。教授は、オックスフォードのフェネル (J. L. I. Fennell) 教授などと共に、参加が強く期待されていたながら、結局参加しなかった専門家の一人であるが、この不参加も、私が離日前に想像していたような、開催地西ベルリンのむずかしい国際政治上の地位によるものでは必ずしもなかったらしい。ソ連の学者が西ベルリンを訪れるのは、今ではそれほど珍しいことではない、とのことであった。

他方、西ドイツ、広くは欧米のロシア史研究者のソ連に対する態度も、ジミン招待の努力が示すように、かつてのように硬直したものではなくなりつつある。西ドイツについていえば、これは若い世代の学者について特にそうである、と私はエアランゲンのルフマン (K.-H. Ruffmann) 教授から教えられた。教授は、西ドイツのロシア史研究者のロシア・ソ連・マルクス主義に対する態度が、戦前、戦中、戦後の三つの世代によってかなりはつきり違っている、という興味深い話をしてくれた。しかし、教授によれば、立場の如何を問わず、ソ連が共産主義国であることを最も強く意識しているはずの西ドイツの戦中派の学者でさえ、日本のロシア史研究者ほどには、ソヴェト史学のイデオロギー性を絶えず気にして研究に従事してはいない、という感じを私はうけた。という意味は、ソヴェト史学のイデオロギー性が、極端ないい方をすれば、今では、毒にも薬にもならないものとして棚あげされている風がある、ということで、現に今度の会議でも、ソヴェト史学の擁護は勿論、その批判も、これを意気こんで書かれた報告は提出されなかった。

ただし——ここであえて告白すれば——日本のロシア史研究の習性になじんで来た私は、会議に参加する前、この点について大きな誤解をしていた。会議前に配布された報告のかなりのもののなかに、私は、個々のテーマに則してソヴェト史学の定説、常識を批判しようとする積極的な姿勢を読みとっていたのである。例えば、ツェルナクは、ヴェチェ (Вече) についてその始源性を示す史料のないことを明らかにし、スミスは、当時の税制 (地租) が前提にしているかに思われるほどには、16世紀に三圃制が普及していなかったことを示唆し、ヘシュは、古ロシア人のギリシア語の知識が貧弱であったことをのべ、クラミーは、Смута後の貴族層の更新という通説に疑義を提出し、シュテークルは、イヴァン4世時代の国章の、ビザンツではなく、西方的な起源の誌証拠をあげ、コンティウスは、歴史

古ロシア史の国際会議に参加して

事象の世俗的説明の成立がロシアにおいておそかったことを述べていたが、これらを私は、多少ともソヴェト史学の通説、定説への批判を意図したものとしたのである。しかし会議に出てみて私は、彼らがことさらにソヴェト史学批判を意図してテーマを選び、結論を導き出したのではないことを知った。また討論の過程には、これも特にソヴェト史学を意識することなしに、事実上ソヴェトの学者の説くところと同じことが主張された場合もあった。私は明らかに読みすぎているのであった。歴史家として恥ずかしいことであった、と今私は考えている。
(’71. 8. 30)

〔附記：ベルリンの会議では終始フィリップ教授に非常に御世話になった。また、ベルリン留学中の伊東孝之氏に、通訳やその他のことで少なからぬ御助力をいただいた。私はこのお二人と、私の報告の英訳に当たってくれた北大の同僚、東出功氏に、ここで心からの謝意を表したい。〕